

別紙

写

炭酸鑛泉ノ義ニ付稟請

炭酸鑛泉ハ明治初年ノ發見ニ係リ本縣有馬寶塚、布引等ノ各地ニ於テ之ヲ採酌販賣スルモノアリ好個ノ飲料トシテ社會ニ公知セラレ海外輸出ノ景況亦甚好望ヲ示セリ抑モ炭酸ナル名稱ガ商標ノ普通名稱ナルハ既ニ業ニ疑ヲ容レサル處ニシテ我商標法、明示セルカ如ク條理ニ於テ個人ノ專有スベキモノニ非ズ英米兩國ト臣モ亦此條理ニ據リ單ニ此普通名稱、登録ヲ許シ個人ヲシテ之ヲ專有セシムルノ暴ヲ爲サルハ深ク信スル處ナリ然ルニ本市元居留地京町八十二番セーレーウ井ルキレノハ東洋ニ於ケル英領米領、諸港及米本國ニ於テ之ガ登録ヲ爲シ其權利ヲ独占シタルトシテ

張レ權利侵害ノ名ノ下ニ我同業者ノ海外輸出ヲ妨害シ今ヤ東洋諸港ニ於テ盛ニ之レガ訴訟ヲ行ヒ馬尼拉ハ逐ニ布引タルカセシメ、販賣ヲ禁止セリ斯ノ如キハ之ヲ一個ノ誤解トシテ看過スルコトヲ得ス同商標品海外販路ノ擴張上甚ダ痛心ニ堪ヘサルノミナラス實ニ我貿易上恐ルヘキ惡例ヲ殘スモノタリ況ンヤ今回聖路易萬國博覽會、開催ニ當リ亦出品ノ内ニアリ輸送ニ際シテ萬一陸揚ヲ拒絕セラレシカ不幸独リ吾業者ノミニ止マラザルガ望ムラタハ速ニ英米本國若クハ東洋ニ於ケル兩國兩地ノ政廳ニ交渉シ其誤解ヲ訂シ豫將來ノ不幸ヲ防遏スラシムコトヲ此稟請也

明治三十六年十月二日

神戶商業會議所會頭岸本豊太郎

農商務省

農商務大臣男爵清浦金吾殿

農商務省

3-1678

0009

本月十三日付發カ五十七號 店照會
 神戸市元居留地在住カ一ニ一ニ
 キンソンニ係ル取調ノ羨ハ大畧別紙ノ
 通り承知跡カニ付カ了知カ本年
 秋服及回着カ也
 明治三十六年十一月廿八日
 兵庫縣知事 服部一三
 農務省商工局長 森田茂吉 殿

農 務 省



一	ウヰルキンソンノ國籍	英國
一	全人カ右名義ノ登録ヲ為シタル國名地名及登録年月日	亞米利加合衆國ワ シントン政府特許局ニ於テ 千九百年七月六日、出願ニ對シ 千九百年十二月廿五日特許登録ヲナシタリ
	登録番號	三五六四三號
	外ニ香港ニ於テ登録セシ趣キト目下	ウヰルキンソン、新嘉坡地方ニ流行中ニ付
	取調フルニ能ハズ	
一	右登録ニ関シ證據モタル法律前記ノ通	
一	右名義専用權主張ノ結果トシテ販賣ヲ	
	禁止セラレタル本邦礦泉ノ名稱營業人ノ氏名及禁止年月日	
	門司長谷川商會、舟小屋炭酸ハ新嘉坡ニ於テ神戶杉田一貫ノ布引炭酸ハ	
	マニラニ於テ販賣ヲ禁止セラレタリ	
	本年一月十五日杉田一貫ノ代理店アーレン	
	ジャエントガランヂヤー ERLANGER AND	
	GALLINGERニ對シマニラ政府ヨリ販賣	
	禁止ノ決定ヲ與ヘタリ	
	杉田一貫ハ本決定ニ對シ證據書類ノ提出方取調ノ上控訴スルニ決定シ	
	居レリ	
	舟小屋炭酸ノ分々目下新嘉坡ニ於	

農 商 務 省

テ控訴中

一本郵人ニ對シ現ニ訴訟ヲ提起シツルヤ 無

附記 呂宋ルキンソンカ香港ニ於テリツケ

及郵船會社ニ對シ提起シタル訴訟ハ其

後取下ガタリ(リツケ)ヤ(フ)ハ布引炭

酸ノ販賣店、郵船會社ハ香港ニ於テ

同炭酸ヲ船中ニテ販賣セタルヲ以テ訴

訟セシタルナリ) 年月日不明

農商務省

御願

明年米國聖路易ニ於テ萬國博覽會開催ニ付
テハ吾々採酌ノ炭酸礦泉ニ對シ事務局ヨリ出
品ノ御指定相成此段謹デ御請仕候就テハ全
品ノ出品ハ勿論賣店ヲ設ケテ販路ヲ大ニ擴張セシ
欲スルニ當リ茲ニ一ツノ疑問アリ即チ現ニ全業者中其
商權ヲ侵害セラレツアル事實ヲ開陳シ適當ノ
御保護ヲ仰カニ事ヲ希望スルモノニ御坐候要ハ
即チ神戶市元居留地京町八拾貳番ゼー、ミ、
ウキルキンソン氏ハ寶塚ニ於テ炭酸礦泉ノ採
酌ニ從事シ專ラ海外ニ販路ヲ求メ居リ從テ東
洋ニ於ケル英領若クハ米領ノ諸港及合衆國ニ於
テ彼自身ノ商標中特ニ「TRANSAM」ナル語ヲ登

農務省

録セシモノトシ其他ノ炭酸礦泉ニシテ其商標中
「TRANSAM」ナル文字ヲ記入セルモノアレハ彼ハ海外各地
ニ於テ自己ノ商標權ヲ侵害セルモノトシ訴訟ヲ提
起シ現ニ訴訟中ニアルモノハ新嘉坡ニ於テ門司市長
谷川商會ノ舟小屋「タンサン」馬尼刺及香港ニ於テハ
神戶市布引礦泉所ノ布引「タンサン」等ニシテ其内
新嘉坡ニ於テハ第一審ニ於テ被告ノ勝訴ニ歸シタル
トモ原告ハ更ニ控訴セルヲ以テ未ダ落着キス香港ニ於
ケル布引「タンサン」ハ未ダ開廷ノ運ニ不至馬尼刺ニ於
テハ本年一月十五日開廷ニ倉卒ノ間ニ判決ヲ與ヘラ
レ不韋布引「タンサン」ハ馬尼刺ニ於テ販賣禁止ヲ
命ゼラシ將來有望ナル好市場ニ向テ一時其輸
出ヲ中止セザルヲ得ザルノ不運ニ會セリ目下控訴ノ手

續中ニアリ前条、如キ次第ニテ全業者、受テタル
打撃ハ非常ナルノミナラズ北清事件以來頗ル其声
價ヲ高メ特ニ熱帶地方ニ其販路ヲ擴張シツアル今
日斯ルニ阻障ニ會スルト貿易上我邦ニ及ボスヘキ影
響著少ナラズト愚考仕候元来吾々ハ帝國
ニ於テ既ニ農商務省特許局ニ自己、商標
ヲ登録シ彼モ亦内地ニ於テ自己、商標ヲ登録
シ刺サハ先年内地ニテ神戸市元町深見岡造
氏ヲ相手取り特許局ニ全人ノ登録セル商標權
取消請求ノ訴訟ヲ提起シ原告ハ敗訴セシニ
モ不拘海外ニ於テハタンサンナル語ガ邦語ニシテ外
國人ニハ意味、了鮮セサルヲ奇貨トシ登録ヲ了
シテ他ノ礦泉ノ侵入ヲ防ギ自家一個ニ利益ヲ壟

農 商 務

斷セントスルノ奸策ニ外ナラズ元来「タンサン」ナル語ハ
商業上一般ニ使用セル普通語ニシテビール「ラム
ネ」若クハ正宗等、如ク即チ決ニテ之ヲ以テ商標ト
ナスベキモノニアラズト魚モ今般吾々同業者ノ出品ニ
際シ彼カ如キ謬見ヲ以テ是等出品物ノ陸揚
ヲ拒絶セシムルカ如キ舉ニ出ズルナキヲ保ニ難ク果
シテ然ラバ其場合ニ當テ折角ノ指定出品物モ徒
ニ彼ノ奸計ニヨリ紛争ノ渦中ニ扱セシ能ク其目
的ヲ達セザラフコトヲ憂フルノミナラズ益々輸出額ノ衰
達セントスル全品ニ對シ海外當局者ノ見解ヲ明ニ
シ以テ將來ノ隆盛ヲ期セント欲スル者ニ有之候元
来「ウヰルキンソン」氏ガ此商標ニ出デタル其源因
如何ヲ尋子レニ始メ此ノ水ヲ採酌シテ廣ク販路ヲ

内外ニ求メントスルニ當リ所謂「タンサン」ナル文字ト名稱
 トヲ撰擇シテ一種ノ商名トナスニ至リタルハ全ク氏獨
 得ノモノニシテ即チ自家ノ發明ニ出デタリトノ誤解モ
 亦其一ナルモノ、如シ現ニ從來ノ訴訟關係ニヨリ法
 庭ニ於ケル本人ノ口供中ニモ「タンサン」ナル名稱ハ自
 己ノ發明ニ係ルモノニテ他人ノ決シテ犯シ能ハザル特
 色ヲ有スル旨ヲ憚ナク明言シ居ルノミナラズ自身モ
 亦深ク其事實ヲ信ジテ疑ハザルハ何人モ能ク知ル
 所ノモノタリ抑モ是レ其本ヲ過リタルノ甚キモノニテ
 此種ノ礦泉水ヲ炭酸水ト稱スルニ至リタル其由來ハ
 明言為シ得ザルモ「ウヰルキンソン」氏ノ採酌ヨリ尚遠
 キ以前ニ已ニ此稱呼アリタルハ掩フメカラザル事實上
 ノ問題タルヤ云フ迄モナク明治八年「有馬」此ノ水
 源地ヲ發見シ内務省司藥場教師「ハ、ウヰド
 ワル」氏ノ分析ノ結果是ヲ名ケテ「炭酸」ト呼ビ
 タル其實跡トシテ今ニ尚同水源地ノ一隅ニ建立
 セシタル石碑ノ記字ヲ見テモ明ナラシ又現ニ當市
 ノ布引炭酸ノ如キ去ル明治十八年七月廣田
 重助ナルモノ炭酸温泉ノ開業ヲ其筋ニ出願ス
 ルニ當リ其建札ニ「炭酸」云々ノ文字ヲ記入シテ
 時ノ内海縣令ノ許可ヲ得タル其願及御指合
 共今ニ存在セル等ノ事實サヘアリテ此等ノ証據
 ニヨルモ「ウヰルキンソン」氏ノ發賣前ヨリ炭酸ノ稱號
 ハ業ニ已ニ世ニ知ラレ一種ノ慣用語ナリシヤ明ナリ
 然ルヲ何ゾヤ「ウヰルキンソン」氏獨事ノ商品トシテ他
 多クノ企業者ニ對シ損害ヲ與フルノミナラズ今

農 商 務 省



後尚飽迄モ其方針ヲ固守セントスルガ如キハ當
ニ独リ斯業界ノ妨害タルノミナラス前途蓋々有望
ナリ一商品ヲ一外人ノ專有的横収ニ歸セシメ置カ
ンハ是實ニ邦家ノ為メ同業者ノ忍ビ能ハサル所ナ
リ畢竟「ウヰルキンソン」氏ニ於テハ自己ヲ信スルノ厚キ也
ヲ顧ミルニ追ナク自カラ其事ノ實ノ誤謬ニ氣付カ
ザルガ為ニ外ナラサル儀ナレバ篤ト本人ヲ御懇諭被
下其迷夢ヲ覺破セシメ然レテ諸外國ハ既ニ登
録中ノ「タンサン」云々ノ文字ヲ取消候様御方法
偏ニ御詮議被_成下度依テ同業者連署ヲ以テ
御願申上候也

追テ別紙本年一月廿七日發行神戸戸ヘラト
新聞記載ノ「マニテ」ニ於テ炭酸事件ノ扱

筆添附仕候也

明治三十六年九月廿八日

神戸市加納町吉丁目吉番屋敷、志

布引礦泉所 杉田一貞

兵庫縣川邊郡多田村ノ内平野

三矢平野礦泉所所主 川久保久之代

野口亀松

兵庫縣有馬郡有馬町

有馬礦泉合資會社社長島居駒吉代

主任 村田猪久馬

兵庫縣知事服部一三殿

Tansan case in Manila Court.

Mr. J. Clifford Wilkinson, we learn from the Manila Freedom of 16th inst, has secured a Judgment in his favour against Messrs. Erlanger and Gallinger who have been using the trade name "Tansan" upon bottled mineral water.

The case was tried before Judge Ambler, who handed down his judgment on the 15th inst. After regretting that circumstances compelled him to decide the case substantially off-hand which is very unsatisfactory, "Judge Ambler says the plaintiff duly registered in the patent office at Washington that which he denominated his trade mark "Tansan," and afterward in January, 1902 the same was duly registered in the proper office in Manila. The defendants have upon the market a water which they also call "Tansan". The evidence before me shows that the word, "Tansan" is a Japanese word meaning "Soda" or carbonic acid", and I am inclined to think that either of these words alone are not descriptive of carbonated mineral water, even in our language. But even if this is not the case, the word "Tansan" either in an English speaking country or a Spanish-speaking country is description of nothing, but is merely an arbitrary jargon of betters, and as such I think, the subject of trade mark when applied to mineral water, or in fact to anything else." The Judge further said: It looks to me as if the defendants were seeking to take advantage of the reputation enjoyed by the plaintiff water by imitating as closely as they might, the plaintiff's trade mark, and I am constrained to say that I think the general appearance of defendants' label, taken in connection with the word "Tansan" appearing upon it is

calculated to deceive, and I believe that the average purchaser of this character of a commodity would not be required to so carefully observe a label as to prevent him from buying the one when he preferred the other, and that he would have in mind and desire to purchase the well-known trademarked "Tansan" goes almost without the saying. The temporary injunction against defendants further use of the name is not dissolved, but the plaintiff is required to give a further bond, to protect the defendants in case the injunction should be found later to have improperly obtained.

Extracted from the "Kobe Herald" 29th January 1903.

(米國商標法條譯文)

商標ノ登録ヲ公定シ及之ヲ保護スル

法律

召集セラルル國會ニ於テ合衆國ノ元老院及代議院ハ此ノ法律ヲ制定ス

外國人又ハ印甸種族トノ通商ニ於テ使用スル商標ノ所有主ハ之ニ規定スル要件ヲ充タストキハ其商標ノ登録ヲ受クニコトヲ得

但其所有主ハ合衆國ニ住居シ若クハ條約ノ協定又ハ法律ニ依リ合衆國ノ人民ニ同様ノ特權ヲ與フル所ノ外國又ハ種族中ニ營業所ヲ有スルヲ要ス

第一 特許局ニ登録セラレニカ為メ出願人

姓名、住所、營業所及國籍、商品ノ種類及其種族ニ於テ其商標ノ使用セラルル物品ノ指定、其見本ヲ有スル商標自体ノ記載並ニ其商標ノ商品ニ應用シ及付着スルノ方法及商標ノ使用セラルル年限ニ明載セル陳述書ヲ提出スル事

第二 合衆國大藏省ニ二十五弗ヲ拂ヒ且特許局長ノ規定ニ依リ其商標ヲ遵守スルコト

第二條 前條ニ規定セル出願ニ凡テ其利益トナルキ權利ヲ創造スルカ為メニ出願者ハ其出願ノ際登録請求ニ係ル商標ヲ使用スルノ權利ヲ有シ而シテ他人、組合、會社ハ同一又ハ極メ

テ類似セル形状ニ於テ其商標ヲ使用スルノ權利
ヲ有セザルコト、其商標ハ前條ニ指示セル外國人
又ハ印甸種族トノ通商ニ於テ使用セザルコト、並
ニ登録ノ為メニ提出セル記載及見中ハ真ニ登録
請求ニ係ル商標ヲ表彰ストノ事項頂ヲ出願人
又ハ組合ノ一員又ハ會社ノ役員ニ依リ証明セラレ
タル宣言書ヲ添フルコトヲ要ス

第三條 斯ル出願ノ受理ノ日付ハ記載ニ且登
録セラルヘキモノトス然レトモ若シ前ニ記載セカキ
外國トノ通商又ハ印甸種族トノ通商ニ於テ商
標トシテ適法ニ出願人ニ依リ使用セシマリト
見レハコトナルカ又ハ外國トノ條約規定又ハ宣言書
規定内ニアラサルキ又ハ單ニ出願者ノ姓名ニ過キ

農 商 務 省

サルトキ又ハ他人所為ニ係リ且ツ商品ノ同種類ノ使用
ニ登録セザルモノトス然レトモ若シ前ニ記載セカキ
法ニ商標ニ類似シ一般人心ニ混淆又ハ錯誤ヲ
来セシムル虞ヲ有スル者ヲ欺クノ虞アルキハ其商標ハ
登録セザルモノトス然レトモ若シ前ニ記載セカキ
ハ出願者標ニ著シ請求、適法ナル推測ヲトスヘシ
而シテ出願人ト前登録証主ノ間ノ爭事スハ
出願人同ノ爭事ニ於テハ特許局長ハ其適用
得ル限ニ及ニ於テハ合衆國衡平裁判所ノ慣
例ニ遵據スヘキモノトス

第四條 商標ノ登録證書ハ亞米利加合衆
國ノ各ニ於テ發行セシ内務省印ヲ鈐シ特許
局長ノ署名ヲ要スヘシ而シテ其記録ハ明細書



ノ刊行騰写物ト共其目的ノ為ニ簿冊ニ於テ
保存セラレヘシ商標ノ騰本及之ト共ニ提出セル陳
述書又宣言書ノ騰本並ニ斯ノ如ク署名各標
印セル証書ハ其商標ノ争事ニ関スル場ノ訴
訟ニ於テ証拠タルヘキトス

第五條 登録證書ハ其日付ヨリ三十年間効
力ヲ有スルコトス然レトモ此國ニ於テ製造セラル物品
ニ著シ登録ヲ請求シ且之ニ使用ニ而シテ外國ノ
法律ニ依リ此國ヨリ短キ期間ノ保護ヲ受ケタル
場合ニ於テハ其者標ノ他ノ場處ニ於テ亦
用權タルノ部力ヲ失ヒタルト時ニ此法律ノ為
メニ此國ニ於テハ登録ノ効力ヲ失フヘキモノトス
但三十年ノ期限ノ経過前六ヶ月以内ニ於

農商務省

テ同ニ條件ニ於テ同ニ期間ニ對シ再ヒ出願
スルコトヲ得

第六條 此法律ニ依リ登録ヲ出願スル者ハ同
一商標ニ関シ保護ヲ得ント欲シテ以前合衆
國大藏省ニ拂込ミタル料金ノ全部又ハ一部
ニ對シ其權利ヲ有スルコトス

第七條 商標ノ登録ハ所有權ノ未確的證
據タルニシテ此法律ニ依リ登録セラレタル商標ヲ
變造、偽造、騰写又ハ巧ニ模倣シ而シテ登
録ニ於テ記載セラレタルト實際同一ノ性質ヲ
有スル商品ニ付着シタル者ハ其所有者ノ出
訴ニ依リ其商標ノ不正使用ニ關スル損害ニ
對シ權利侵犯ノ訴訟ヲ受ケル者トス而シテ

被害者ハ亦前項ノ外國通商又ハ印甸人ノ
通商ニ使用スル斯カル商標ノ不正使用ヲ禁
止スルカ爲メ且ツ其不正ノ使用ヲ止ムル者ヲ管
轄スル裁判所ニ於テ其損害ヲ要償スルカ爲
メ衡平法ニ從テ其救行ヲ求ムヘシ而シテ合
衆國ノ各法廷ニ訴訟ノ價格ニ関セズ斯カル
事件ニ於テ初審及上訴ノ管轄權ヲ有ス
モノトス

第八條 其商標違法ノ業務又ハ有害ノ物
品ニ使用セシメタル者又ハ商標ノ販賣ニ於テ社會
ヲ欺クノ目的ヲ以テ使用セシメタル者又ハ其登録
證主詐謀ノ所爲ヲ以テ受ケタル者ハ如何ナル
事件ニ於テモ其法律ノ規定ニ依リ訴訟ヲ

農商務省

提起スルコトヲ得サルコトス

第九條 口頭又ハ文書ヲ以テ詐偽ノ陳述又ハ
宣言、其他詐偽ノ手段ヲ以テ特許局長ノ官衙
ニ於テ商標ノ登録ヲ受ケ或ハ商標ノ所有者トシ
テ其登録ヲ受ケ又ハ商標ニ関シテ登録ヲ受ケタ
ル者ハ之レカ爲メ其被害者ニ蒙ラセタル損害ニ
對シ權利侵犯ノ訴訟ニ於テ要求セラルヘキ賠償金
ヲ拂フヘキコトス

第十條 法律ハ商標ノ不正使用ニ依リ損害
ヲ蒙リタル者カ假令法律ノ條項制定セシメ
トスルモ尚其普通法又ハ衡平法ニ於テ有スル所ノ
救行ヲ妨ケ減シ、破リ又ハ避クルモノニアラス

第十一條 其法律ハ登録ノ年限消失シタル後

商標ニ對スル請求ヲ妨クルコト解スヘカラス又
ハ訴訟トナリテ商標ガ外國ニ輸出セラレハキ商品又
ハ印甸種族ト適法ニ通商スルノ目的ヲ有スル物
品ニ使用セラレクニテラセハハ國ノ人民相互間
ノ訴訟ニ於テハ合衆國ノ何レノ法廷ニモ管轄權
ヲ與フヘキモノト解スヘカラス

第十二條 特許局長ハ施行細則ヲ發布シ
商標使用權ノ移轉及特許局ニ於テモ移
轉ヲ登録スルノ書式ヲ定ムコトヲ得

第十三條 或ル外國ノ法律ニ於テ其登録ヲナス
ノ條件トシテ其國ノ登録ヲ要スルトキハ其國ニ
於テ商標ノ保護ヲ受ケント欲スル所ノ其國ノ
人民及臣民ハソレ外國人ニ許シタラス如ク其

農 商 務 省

目的ノ為メニ其商標ヲ登録シ且特許局ヨ
リ其証明ヲ受ケルモノヲ得

一千八百八十一年三月三日裁可ス

文書課長

明治廿七年一月二十日 接受

80

清書

原簿

明治廿七年一月十四日 起草
同日 發遣

次官

取調課

主任

通商局

珍田外務次官

和田農商務次官宛

米人ウナルキンソンノ主張ニ係ル炭

酸泉名義専用差止方ニ関ス件

三十七年一月廿一日

外務省

神戸市在住米人ウナルキンソンノ海外ニ移ル

炭酸泉名称登録ノ取消交渉方ニ付

昭和十年十月三十日附商第百九十七號ヲ以テ

此照會左成リ其後十二月九日附第百二十九號

号ヲ以テ全件ニ関ス兵庫県知事ノ

報告書貴省有本商高工局長ヨリ當省

和村通商局長ニ送付左成此知又右

ウナルキンソンノ海外諸國ニ登録シタル商

急

明治廿七年一月二十日

標並、令人、差止訴訟、係本邦人
ノ知製造、炭酸、商標、我國、於
登録済、モ、本邦、存件、整理上
必要有之、付、至急、内閣、答、出、給、以、
此、以、照、會、也、

追、本、登録、係、之、取、之、以、其、登録、
年月、日、並、之、因、形、等、詳細、清、冊、其、他、
文、以、其、中、添、付、

外務省

明治三十年七月印行

商標公報

第百五十二號

農商務省特許局

3-1678

0028

商標公報第百五十二號目次

自第八五七七號

至自明治三十年四月五日

類別	頁數
第一類	至自 五一頁
第二類	至自 七六頁
第三類	七頁
第十七類	至自 一八頁
第二十一類	至自 六二頁
第三十二類	至自 二七頁
第三十四類	至自 三三頁
第三十七類	三〇頁
第五十一類	三二頁



第八五四一號

○出願 明治廿九年十一月廿四日
 ○登録 全三十年四月二日
 ○品名 第一類 酸類、鹽類「アルカリ」、漂白粉、澱粉、膠、酒精、「グリセリン」、「キナエン」、「セルヒチ」、丁酸、舍利別、煎劑、丸藥、膏藥、藥油、麝香、丁香、食鹽、石灰、樟腦、其他ノ金屬化合物ノ化學品及藥品、鐵物酸、化學品及藥劑、芳香化合物、化學品及藥劑、石鹼ヲ除クノ外ノ脂肪化合物ノ化學品及藥劑、植物鹽基ノ化學品及藥劑
 ○要部 文字ヲ除クノ外全形
 ○神奈川県横濱居留地廿九番
 獨乙國臣民

化學品及藥劑商
 ハー、アールレンス繼續社
 業務担当社員
 エミール、ウイスマル

ウキキレンノ商標

第八五七四號



○出願 明治三十年一月四日
 ○登録 全 年四月六日
 ○品名 第一類 礦泉
 ○要部 羅馬字「クワンカン」以外ノ文字ヲ除キ全形
 ○兵庫縣神戸居留地海岸通三番
 英國臣民
 礦泉商
 シモン、シリフォルド、ウキキレンソン

第八五四二號



○出願 明治三十年一月十一日
 ○登録 全 年四月二日
 ○品名 第一類 樟腦
 ○要部 圓形ノ中心ニ圓點ヲ顯ハシ以テ篆体日ノ字ニ象リケルモノ
 ○兵庫縣神戸市苅合村千六百拾貳番屋敷

樟腦精製販賣業
 日本樟腦株式會社
 専務取締役
 松田 茂太郎

第八五三三號



○出願 明治三十年一月十五日
 ○登録 全 年四月二日
 ○品名 第一類 樟腦
 ○要部 雲ニ登ヘタル富士山ノ圖ヲ畫キタルモノ
 ○全 上

松田 茂太郎

號七七五八第

SUNLIGHT

○出願 明治三十年二月十五日

○登録 全 年四月六日

○品名 第一類 臭氣止薬、防腐劑、消毒薬、洗淨劑、酸類、鹽類、「アルカリ」、鹽基類、漂白粉、護膜、膠、糊、石鹼、酒精、「グリセリン」、「キナエン」、「モルヒネ」、「丁酸」、合利別、煎劑、丸薬、膏薬、藥油、麝香、丁香、食鹽、石灰、金屬ノ化合物、礦物酸、芳香化合物、脂肪化合物、植物鹽基類

○要部 全形

○英國「チエスター」州「パーケンヘッド」附近「ボートサンライト」

英國臣民
石鹼製造業
有限責任レザア、プロヂース、コンパニー
業務担当取締役
シヨモン、スミツス、ホルガツソン

五

號五七五八第



○出願 明治三十年二月十二日

○登録 全 年四月六日

○品名 第一類 酸類、鹽類、「アルカリ」、鹽基類、漂白粉、護膜、膠、糊、石鹼、酒精、「グリセリン」、「キナエン」、「モルヒネ」、「丁酸」、合利別、煎劑、丸薬、膏薬、藥油、麝香、丁香、食鹽、石灰、金屬ノ化合物、礦物酸、芳香化合物、脂肪化合物、植物鹽基類

○要部 全形

○英國「ランカスター」州「リヴァプール」市「エキンチエン」市、ビルデン「第十一番」號

英國臣民 化學製造業

有限責任ユーナイテッド、アルカライ、コンパニー

業務担当取締役

シヨサイアス、クリストファアル、カンブル
ホルブルツク、ガスケル、シヨニヨル

號六七五八第



○出願 明治三十年二月十二日

○登録 全 年四月六日

○品名 第一類 酸類、鹽類、「アルカリ」、鹽基類、漂白粉、護膜、膠、糊、石鹼、酒精、「グリセリン」、「キナエン」、「モルヒネ」、「丁酸」、合利別、煎劑、丸薬、膏薬、藥油、麝香、丁香、食鹽、石灰、金屬化合物、礦物酸、芳香化合物、脂肪化合物、植物鹽基類

○要部 全形

○全上

シヨサイアス、クリストファアル、カンブル
ホルブルツク、ガスケル、シヨニヨル

四



○出願 明治廿九年十一月廿日
 ○登録 全 三十年四月二日
 ○品名 第二類 藍玉、藍錠、紫根、紅、朱、丹、綠青、燒青、洋靛、白粉、胡粉、藤黃、蘇木、其他ノ金屬化合物、染料及顔料、芳香化合物ノ染料及顔料
 ○要部 文字ヲ除キ全形
 ○獨乙國 ルートウイヒスハーフェン、アム、ライン
 獨乙國臣民
 染料及顔料商
 バヂセ、アニリン、ウンド、ソーダ製造社
 取締役 ハイ ン リ ッ ヒ、ブル ン ク
 ア ド ル フ、カ ヘ レ ン ク



○出願 明治廿九年十一月二十日
 ○登録 全 三十年四月二日
 ○品名 第二類 藍玉、藍錠、紫根、紅、朱、丹、綠青、燒青、洋靛、白粉、胡粉、藤黃、蘇木、其他ノ金屬化合物、染料及顔料、芳香化合物ノ染料及顔料
 ○要部 文字ヲ除キ全形
 ○全上
 ハイ ン リ ッ ヒ、ブル ン ク
 ア ド ル フ、カ ヘ レ ン ク



○出願 明治廿九年十一月廿日
 ○登録 全 三十年四月二日
 ○品名 第二類 藍玉、藍錠、紫根、紅、朱、丹、綠青、燒青、洋靛、白粉、胡粉、藤黃、蘇木、其他ノ金屬化合物ノ染料及顔料、芳香化合物ノ染料及顔料
 ○要部 文字ヲ除キ全形
 ○全上
 ハイ ン リ ッ ヒ、ブル ン ク
 ア ド ル フ、カ ヘ レ ン ク



○出願 明治三十年二月九日
 ○登録 全 年四月五日
 ○品名 第三類 油漆
 ○要部 登録商標ノ文字ヲ除キ全形
 ○東京府東京市芝區三田四國町一番地
 油漆製造業
 光明合資會社
 業務担当社員
 田 阪 初 太 郎

第 八 四 五 八 號



- 出願 明治三十年一月四日
- 登録 全 年四月二日
- 品名 第二十七類 綿絲
- 要部 欄及文字ヲ除キ全形
- 全上

ウイルフリイド、ウオシングトン、ナル

九

第 八 五 四 七 號



- 出願 明治三十年一月四日
 - 登録 全 年四月二日
 - 品名 第二十七類 綿絲
 - 要部 雲中ニ聳ヘタル富士山ノ下方ナル松ニ羽衣ノ懸リタル様ヲ畫キタルモノ
 - 神奈川縣横濱居留地五十番
 - 兵庫縣神戸居留地七番
- 英國臣民
綿絲商
コ ン ス 商 會
業務担当社員
ウイルフリイド、
ウオシングトン、ナル

八

號九六五八第



○出願 明治三十年一月四日
 ○登録 全 年四月五日
 ○品名 第二十七類 綿絲
 ○要部 一頭ノ牛カ体ヲ左方ニ向ケ右方ヲ願ミテ雜草ノ生シタル地上ニ立テ其ノ背ニ花籠ヲ背負ヒ横笛ヲ吹ケル一箇ノ童子ガ体ヲ左方ニ向ケ右方ヲ願ミテ乘リタル圖ヲ畫キタルモノ
 ○神奈川縣横濱居留地五十番
 ○兵庫縣神戸居留地七番
 英國臣民
 綿絲商
 コ ン ス 商 會
 業務担当社員
 ウヰルフリード、ウオシントン、ナル

第八五四九號



○出願 明治三十年二月九日
 ○登録 全 年四月二日
 ○品名 第二十七類 綿絲
 ○要部 欄及文字ヲ除クノ外全形
 ○神奈川縣横濱居留地七十一番
 ○兵庫縣神戸居留地一番
 英國臣民
 綿絲商
 ウイリアム、モリソン、
 ストロロン 商會
 業務担当社員
 ショーン、ピーター、リード

第八五五〇號



○出願 明治三十年一月四日
 ○登録 全 年四月二日
 ○品名 第三十一類 木綿織物
 ○要部 文字ヲ除キタル外全形
 ○神奈川縣横濱居留地五十番
 ○兵庫縣神戸居留地七番
 英國臣民
 木綿織物商
 コ ン ス 商 會
 業務擔當社員
 ウイルフリイド、
 ウオシングトン、ナル

第八五五一號



○出願 明治三十年一月四日
 ○登録 全 年四月二日
 ○品名 第三十一類 木綿織物
 ○要部 雲中ニ聳ヘタル富士山ノ下方ナル松ニ羽衣ノ懸リタル様ヲ畫キタルモノ
 ○全上
 ウイルフリイド、ウオシングトン、ナル

第 八 五 五 三 號



- 出願 明治三十年二月九日
- 登録 全 年四月二日
- 品名 第三十一類 木綿織物
- 要部 文字ヲ除キ全形
- 全上

シヨーン、ピーター、リード

第 八 五 五 二 號



- 出願 明治三十年二月九日
- 登録 全 年四月二日
- 品名 第三十一類 木綿織物
- 要部 五枚ノ葉ヲ有スル蕪苧
- 神奈川県横濱居留地七十一番
- 兵庫縣神戸居留地一番
- 英國臣民
- 木綿織物商
- ウイリアム、モリソン、
- ストロロン商會
- 業務擔當社員
- シヨーン、ピーター、リード



○出願 明治三十年一月四日
 ○登録 全 年四月二日
 ○品名 第三十一類 木綿織物
 ○要部 一頭ノ牛ガ跡ヲ左方ニ向ケ右方ヲ順ミテ雜草ノ生シタル地上ニ立
 ナ其ノ背ニ花籠ヲ存負ヒ横笛ヲ吹ケル一箇ノ童子ガ体ヲ左方ニ向ケ右
 方ヲ順ミテ乘リタル圖ヲ畫キタルモノ
 ○神奈川縣横濱居留地五十番
 ○兵庫縣神戸居留地七番
 英國臣民
 木綿織物商
 コ
 ン
 ス
 商
 會
 業務担当社員
 ウイルフリイド、ウォシントン、ナル



○出願 明治三十年一月四日
 ○登録 全 年四月二日
 ○品名 第三十二類 毛織物
 ○要部 文字ヲ除キタル外全形
 ○神奈川縣横濱居留地五十番
 ○兵庫縣神戸居留地七番
 英國臣民
 毛織物商
 コ
 ン
 ス
 商
 會
 業務担当社員
 ウイルフリイド、
 ウォシントン、ナル



- 出願 明治三十年一月四日
- 登録 全 年四月二日
- 品名 第三十二類 毛織物
- 要部 花及葉子有スル一本ノ薔薇ノ折枝ヲ畫キタルモノ
- 全上

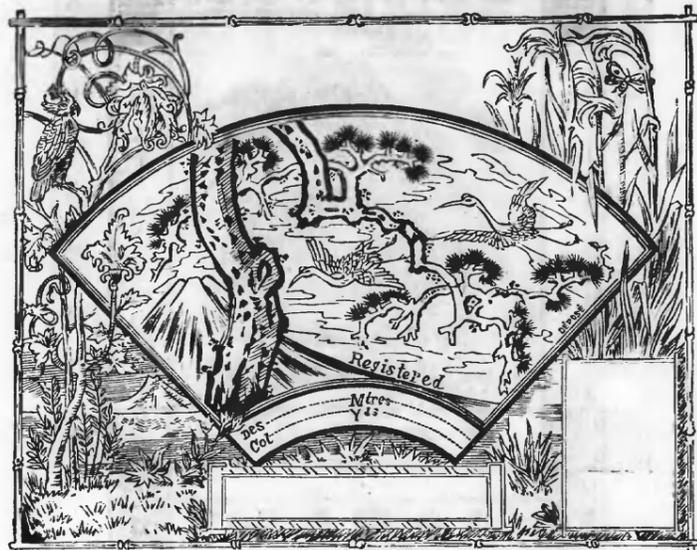
ウイルフリイド、ウオシングトン、ナル



- 出願 明治三十年一月四日
- 登録 全 年四月二日
- 品名 第三十二類 毛織物
- 要部 一羽ノ雄鶏カ体ヲ左方ニ向ケ後方ヲ順ミテ立タル圖
- 全上

ウイルフリイド、ウオシングトン、ナル

第八五五八號



- 出願 明治三十年一月四日
- 登録 全 年四月二日
- 品名 第三十二類 毛織物
- 要部 文字及点線ヲ除クノ外全形
- 全上

ウイルフリイド、ウオシングトン、ナル

二十一

第八五五七號



- 出願 明治三十年一月四日
- 登録 全 年四月二日
- 品名 第三十二類 毛織物
- 要部 雲中ニ聳ヘタル富士山ノ下方ナル松ニ羽衣ノ懸リタル様ヲ畫キタルモノ
- 全上

ウイルフリイド、ウオシングトン、ナル

二十一



第八五五九號

FINDLAY, RICHARDSON & CO
YOKOHAMA. KOBE

Registered Trade Mark, A. 7. 2002.

- 出願 明治三十年一月四日
- 登録 全 年四月二日
- 品名 第三十四類 交織物
- 要部 一頭ノ膺カ前隻足ヲ屈メ左方ニ向テ立タル圖
- 神奈川縣横濱居留地六番
- 兵庫縣神戸居留地百拾番

英國臣民

交織物商

フィンドレイ、リチアードソン商會

業務擔當社員

ナヤアルス、シヨルシ、ブカナン、ダンロツプ



CORNES & CO

英國コンス商會

日本横濱神戸

JAPAN

- 出願 明治三十年一月四日
- 登録 全 年四月二日
- 品名 第三十二類 毛織物
- 要部 一頭ノ牛カ跡ヲ左方ニ向テ右方ヲ顧ミテ雜草ノ生シタル地上ニ立テ其背上一花籠ヲ背負ヒ横笛ヲ吹ケル一個ノ童子ガ体ヲ左方ニ向テ右方ヲ顧ミテ乘リタル圖ヲ畫キタルモノ
- 全上

ウイルフリード、ウオシングトン、ナル



○出願 明治三十年一月四日
 ○登録 全 年四月二日
 ○品名 第三十四類 交織物
 ○要部 文字ヲ除クノ外全形
 ○全上
 ナヤアルス、シヨルジ、
 ブカナン、メンロツブ



○出願 明治三十年一月四日
 ○登録 全 年四月二日
 ○品名 第三十四類 交織物
 ○要部 文字ヲ除キタル外全形
 ○神奈川縣横濱居留地五十番
 ○兵庫縣神戸居留地七番
 英國臣氏
 交織物商
 コン ス 商 會
 業務担当社員
 ウイルフリイド、
 ウオシングトン、ナル

第八五六二號



- 出願 明治三十年一月四日
- 登録 全 年四月二日
- 品名 第三十四類 交織物
- 要部 花及葉ヲ有スル薔薇ノ折枝ヲ畫キタルモノ
- 全上

ウイルフリイド、ウオシングトン、ナル

二十六

第八五三三號



- 出願 明治三十年一月四日
- 登録 全 年四月二日
- 品名 第三十四類 交織物
- 要部 一羽ノ雄鶏カ体ヲ左方ニ向ケ後方ヲ顧ミテ立タル圖
- 全上

ウイルフリイド、ウオシングトン、ナル

二十七

第 八 五 六 四 號



- 出願 明治三十年一月四日
- 登録 全 年四月二日
- 品名 第三十四類 交織物
- 要部 文字及点線ヲ除キタル外全形
- 全上

ウイルフリイド、ウオシングトン、ナル

二十九



第 八 五 六 四 號

- 出願 明治三十年一月四日
- 登録 全 年四月二日
- 品名 第三十四類 交織物
- 要部 雲中ニ聳ヘタル富士山ノ下方ナル松ニ羽衣ノ懸リタル様ヲ書キタルモノ
- 全上

ウイルフリイド、ウオシングトン、ナル

二十八

第八五七二號



- 出願 明治三十年一月四日
- 登録 全 年四月五日
- 品名 等三十七類 醤油
- 要部 菱井桁ノ内ニ楯形ヲ菱狀ニ顯ハシタルモノ
- 愛媛縣新居郡泉川村四百貳番戸

平民
 醤油醸造業
 山内槐山

三十一

第八五六六號



- 出願 明治三十年二月九日
 - 登録 全 年四月二日
 - 品名 第三十四類 絹綿麻毛外ノ織物及交織物
 - 要部 五枚ノ葉ヲ有スル蕪葉
 - 神奈川縣横濱居留地七十一番
 - 兵庫縣神戸居留地一番
- 英國臣民
 絹綿麻毛外ノ織物商
 ウイリアム、モリソン、
 ストロロン 商會
 業務担当社員
 ショーン、ピーター、リード

三十一

第八五六七號



○出願 明治廿九年九月廿七日

○登録 全 三十年四月二日

○品名 第五十一類 摺附木

○要部 親猿カ一匹ノ子猿ヲ肩ニ乗セ左方ニ向ヒ腰ヨリ上部ヲ
顯ハセルモノ

○大阪府泉南郡佐野村四千四百貳十一番屋敷

摺附木製造業
弘燐株式会社
社長 山中庄兵衛

第八五七三號



○出願 明治廿九年十月十六日

○登録 全 三十年四月五日

○品名 第五十一類 摺附木

○要部 一頭ノ猿カ体ヲ正面ニ向ケ左方ヲ振向キ數多ノ摺附
木箱ヲ盛リタル紙付ノ籠ヲ首ニ懸ケ前後手ニテ籠ノ縁ヲ支
へ後手ニテ一個ノ摺附木箱ヲ捧ケ一本ノ旗ヲ腋ミ後兩手ニ
テ立チタル圓ヲ畫キタルモノ

○大阪府大阪市南區御藏跡町十四番屋敷

平民
燐寸製造業
加納 檜太郎

明治三十年七月十四日印刷
全 三十年七月十五日發行

農商務省特許局

印刷者 多田榮次

東京市神田區小川町壹番地

傳文館主

賣捌人 大橋新太郎

東京市日本橋區本町三丁目
八番地

乙 流

甲 流



第 一 六 〇 一 〇 号
 設 立 年 月 日 記 録
 打 田 一 貴



明治七年二月二十二日接受

手管通商局

西園簿

案

公オ一四号

受第 八九五號

炭酸訴訟事件：関シ貝申

在神戸英國人ヂエ、クリフランド、ウヰルキンソン (J. Elford Wilkison) の明治二十三年中日屬附近、寶塚
 礦泉ヲ其所有主ヨリ譲受テ其礦泉水ヲ純詰
 ノトシ寶塚ミネラルウォーター (Takasagayuka Mineral
 Water) ナル詰ヲ記シタル貼紙ヲ之レニ附シテ市場
 ニ賣出シ当新嘉坡ニ於テハ、ゴスワシ商會 (Gosling
 & Co.) ヲ販賣代理店トシ該品ヲ輸入シ居ラタルニ
 同商會ハ前記寶塚ナル名稱ハ改州人、之レヲ
 発音スルニ困難ヲレヲ以テ他ニ発音シ易キ詰ニ
 代ヘラハ如何ント、注意ヲ右ノ、ウヰルキンソンニ為シ
 三十七年四月七日記録
 在嘉坡日本通商局
 タルヨリ白人ハ當時在神戸、英國領事、勧告ニ注
 意ニ更ニ新規、青色地貼紙ヲ調製シ之レニ寶塚
 ミネラル、ウォータート記シタル外夫ナル白字ニテ頭ハレ
 タル Takasaga ナル詰ヲ横印シタル當時白人ハ該
 タンサンナル詰、支義上、意味ヲ知ラカリシ其時
 ヲヨリ自巳、製造ニ係ル礦泉水ヲ、タンサントシテ右
 上ニ廣告シ三十一年四月中辛邦ニ於テ右ノ貼紙ヲ
 商標トシテ登録シ又三十三年米國ニ於テ其他
 ハ哇、印度、豫州ニ於テモ同様ノ登録ヲ得タル由
 ニラ三十一年ヨリ更ニ当地マカリストター商會 (Mullister
 & Co.) ヲ代理店トシタルレカ三十四年中再ニ当地
 ボルネス商會 (Borneo & Co.) ヲ代理店トスルコトニ改
 ノ日時ニマカリストター商會、代理店タルコトヲ止メ

リシカ内商會ハ四年九月ヨリ司長谷川商會
 ノ製造ニ係リ丹不屋炭酸、発賣代理店トナリ十月
 七日当地新聞紙ヲ以テ丹不屋炭酸 (Tanagaya
 Tanaka) ノ發賣廣告ヲ刊シタルニ「ウヰルキンソン」
 代理店タル「ホリネ」商會ハ曰ク、依頼ニ依リ十一月
 十二日長谷川商會、炭酸水ヲ「タンサン」ナル名称
 ニテ市上ニ廣告販賣セザレ様マカリスター商會ニ照
 會シタルニ内商會ハ「タンサン」ヲ以テ「日本」於テ礦
 泉水 (Mineral water) ヲ言明スルニ一般使用スル言
 葉ヲ以テ以テ何人モ之レカ専使權ヲ有スルモノニテ「サ
 ル」旨回答シタルニ「ウヰルキンソン」ハ遂ニ其代理店
 「ホリネ」商會ニ当地裁判所ニ訴訟ヲ提出スル
 キコトヲ依頼シ十二月十六日ヲ以テ曰ク「タンサン」
 諸ヲ自巳カ曰ク「日本」ヨリ輸入スル礦泉水、商標トシテ、
 専使權ヲ新嘉坡ニ於テ與ヘラレ度旨、領事ヲ當
 地「シユプリム・コート」 (Supreme Court) ニ提出スルニ至リ
 タリ
 「チーフ・ジャスター・サ・ワネ」 (Chief Justice
 Sir Lionel Cox) ニ右ノ訴訟ヲ受理シ審理、未昨
 三十五年一月十四日別紙第一号判決書ヲ通リ
 原告「ウヰルキンソン」ノ敗訴トナリシカ曰ク「人ハ之レニ服セ
 ズ直ニ訴訟ヲ以テシタルヲ以テ曰ク判事ハ在神戸及
 横濱、英國領事ニ案件ニ関スル證據調ヲ依
 頼シタルニ在神戸英國領事ハ昨年十一月二十日
 在横濱英國領事ハ今年九月中各其領事館
 ニ於テ法律上有効ナルハニ証言ヲ原被両造ヨ

リ激シ其書類ヲ曰判事ニ廻付シタルヨリ愈々本年
 十月二十四日ヲ以テ原告被告、弁論ヲ開始スルコトヲ
 ノ原告ハ右期日前本邦ヨリ自ラ当地ニ出張シ来
 ノ被告長谷川高會ハ其店員一名ヲ派シ各其交
 護士、糸考人トシテ出廷シ二十四、二十五、二十六日
 及十二月四日(午前)、四日間双方ヨリ提出シタル証
 人、証言ヲ聴取シ十二月八日(午後)及九日、二日間
 ハ原告被告、意見ヲ辯論シ夏レニテ弁論終結トナ
 リ去ル十七日曰判事ハ別紙ヲ二号判決書ヲ通
 リ判決ヲ言渡シ被告マカリスター高會、敗訴トナ
 リタリ依テ曰高會ハ此判決ニ服セス更ニ曰裁判
 所ニ上告シ再審ヲ請願シタル由ナリ
 右、判決ニ依レハトシサンレテ諸ハ本邦ニ於テ礦泉

在新加坡日本領事館

水ヲ意味スル普通名辭ト認定スルコトヲ得スル
 キンレレカ其製造ニ係ル礦泉水ヲ名稱スル為ノ曰
 人カ一般ニ使用セラル一種、假想的名稱ヲ得シ
 モノニレテ即チ法津上商標トシテ適用シ得ル
 モノナリ又縱令此語ヲ被告カ文明スル如ク礦泉
 水ヲ言明スル普通名詞ト假定スルモ新加坡ニ於テ
 ハ巴ニオニ、意味ヲ有シ原告、礦泉水、ミヲ指不
 スルモノナレバ如ク右ニ解釈セラレ居レリ云々ト有之
 然ルニ本邦ニ於テ礦泉水ヲ炭酸ト稱シ市場ニ賣
 出シタルハ或ハ少サレキントレテ以テ礦泉水ト稱シ
 ノ事實有之或モ不斗ヲ得共抑モ礦泉水ヲ炭
 酸水ト稱スルコトハ遠ク明治十年頃以前ヨリ行ハ
 レタルモノニテ今日本邦市場ニ於テ亦小屋炭酸、

外数十種、何々炭酸ナリ名稱ヲ以テ鑛泉水ヲ販賣
 セルモノアルハ、ウヰルキンソレカ炭酸ナリ名稱ニ依テ販路
 ヲ擴張シタレヨリ之レニ模倣シテ其諾ヲ使用スルニ
 至リタレモ、ト直チニ臆弊スルハ甚ク皮相ノ見ニシテ
 寧ロ炭酸ハ卑ニ炭酸水ナリ畧諾ニ過キサルモノト
 スル者至当ニシテ即チ炭酸ハ炭酸水ニシテ炭酸水
 ハ鑛泉水ナレカ故ニ炭酸ナリ諾ハ鑛泉水ヲ言明ス
 ル普通名詞ト相考サレ、付小官ハ法廷ニ於テ右旨
 趣、証言ヲ致置サ、又当地ニ於テ、ウヰルキンソレノ諾
 ハ直チニウヰルキンソレ、鑛泉水ヲ意味スルカ如ク解
 釈セラレ居レリト云フモ現ニ舟小屋炭酸、外獅子印
 炭酸、有馬炭酸等本邦商、手ニ依テ販賣セラレ
 居リ此等ハ決シテウヰルキンソレ、炭酸ト誤解セラ
 レ、コトナク一種ノ鑛泉水トシテ漸ニ販路ヲ得フ、アレノ
 事實ヨリ激スレハ斯レ見解ハ實ニ極端ナリ議論
 ト評スレヨリ外可無之要スレニ該判決、首趣ハ当
 ヲ得タルモノニ無之様相考サ
 前述ノ通り本訴訟事件ハ未タ確定ニ相成居ラス
 得共若シ該判決ノ通り確定スレニ至ラハ本邦ニ
 於テ炭酸ナリ名稱ヲ以テ販賣スル、ウヰルキンソレ、炭
 酸以外、鑛泉水ハ今後当地ハ勿論延ヒテ香港
 其他ノ地方ハ輸入スルコト能ハサル結果ト相成ルヤモ
 不斗之レカ為メ数多、該商人カ影響ヲ蒙ルコト
 ト實ニ可不動ニ付若シ其筋ニ於テモ該判決ヲ至
 当ト認メラレザレニ於テハ此際炭酸ニ関スル帝國
 政府ノ意見ヲ当地殖民地政府ニ通告シ置クコト必

在籍商標

上告裁判
ノ判決アリ
付ツル

要ニ可有之ト存テ間至急其筋ハ少照會、上何
分、少回訓相成テ様致度別紙相添此段及
貝申テ敬具

明治三十六年十二月二十日

在新嘉坡領事館事務代理

外務書記生大賀亀吉



外務大臣男爵小村壽太郎殿

追テ奉文上申、通り日政府ニ通告書ヲ送付スル

コトニ由決定相成リ、英文ニテ認メタル炭酸ニ

関スル解状書ヲ少廻付有之テ様致度將又

上告裁判所ハ明年二月二十二日開廷、答ニ付

在新嘉坡日本領事館

可成該期日前、右ノ申込ニテ為レ置テ方都合

宜敷カレハト存テ、付至急少詮議有之度此

段併セラ申進也

that the word *Tan San* is a general name denoting generally mineral water produced in Japan and the defendants contend that such a general word cannot be claimed as a Trade mark.

Against this view the plaintiff quoted *Brillon v Grenier* (1897 W.N.14.) where the words "*Tamar Indien*" were protested. But the decision seems to rest on the ground that the name was really distinctive of the plaintiff's *Logenge*. The Vice Chancellor said "Any man might adopt any name he pleased for the purpose of distinguishing the thing he sold." The plaintiff has taken such a name I cannot therefore take it as conclusive on the question. In *Redway v Banham* (1896 App Cas 199) also relied upon by the plaintiff it had been found in fact that the name claimed as a Trade mark "*Camel hair Belting*" had become known as describing the plaintiff's *Belting* and that the description by the defendants of their goods as *Camel Hair Belting* would deceive purchaser into the belief that they were getting the *Belting* made by the plaintiff so that the Trade mark although the words by themselves were descriptive had acquired in the trade a secondary signification and had become distinctive of the plaintiff's goods. *Saxlehner v Appollinaris Co* (1897 1 Ch 893) of the plaintiff's goods also quoted for the plaintiff has no bearing on the question now dealt with. The defendants quoted *Davis v Strickhol* (59 L.T.S 884) in which Chitty J held that "*Botol*" a Swedish word denoting a kind of beer produced in Sweden and Norway could

not be registered as a trade mark under the Patent designs and Trade mark Acts 1883. The case though not directly in point supplies argument against the plaintiff's claim. But apart from the Statute it is well settled that when a name claimed as Trade mark is merely descriptive of the article to which it is applied and does not connect it with any particular manufacturer in other words when it is not distinctive the name cannot be protected as a Trade mark (*Sebastian Law of Trade Marks* 4th ed. p. 57) here as the evidence shews that "*Tan San*" is a general name denoting Japanese mineral water and is not distinctive of the plaintiff's water I must hold that the name by itself cannot be claimed as a Trade mark. If the plaintiff was right in his contention although he could not claim a monopoly in Japanese mineral water and could not prevent other persons from importing Japanese mineral water yet he could claim the help of the Court for the purpose of preventing those persons from calling the water by its proper name. To such a claim the answer may be given in the word used in the American case quoted by Sebastian at p. 49 "Equity will not enjoin against telling the truth."

The motion is refused with costs.

s/d/ Lionel Cox C.J.

14th January 1902

Wilkinson v. Mc Alister & Co

This is a motion by the plaintiff for an order restraining the defendants from selling mineral water and other waters not being the water imported by the plaintiff under the name of "Tan San" or other name of which the word "Tan San" forms part.

The motion is supported by the affidavit of Frank Hilton who states that the plaintiff has for some years past imported into Singapore a mineral water and has applied to the same the name of "Tan San" and the same has become known in Singapore under that name and has become identified with the name of plaintiff. And defendants recently to wit on the 7th October 1901 long after the plaintiff had commenced to use the word "Tan San" as applied to his mineral water advertised for sale mineral water under the name of "Funagoya Tansan". For the defendants it is contended that it is not proved that plaintiff's water was imported as "Tan San" and has become identified under that name with the plaintiff's name. The evidence in support of the plaintiff's claim is contained in Frank Hilton's affidavit para 2 quoted above and also para 7 "I am of opinion the word "Tan San" on mineral waters would lead any person purchasing the same into the belief that he was getting the original "Tan San" imported and manufactured by the plaintiff and that of Frederic Wreford "In my opinion people in Singapore purchasing mineral water under the name of "Funagoya Tansan" would be deceived

into believing that it was the plaintiff's water. For the defendants I have the affidavit of Horatio Stephens who says that "Tan San" is a Japanese word meaning Carbonic Acid and is used to denote generally Japanese mineral waters and is not confined to meaning mineral water of any particular spring. And the statements above referred to of Hilton and Wreford are expressly denied. The plaintiff also produces copies of the local newspapers of 23rd October and 2nd November 1901. There is also one of 1st March 1901 (put in by the defendants) containing advertisements of plaintiff's water under the name of "Tan San". On the other hand defendant produces the labels used by the plaintiff and I have also a bottle of the plaintiff's water. In the former the water is called Takaradzuka mineral water Tan San on the label on the bottle bears the word "Bottled at Takaradzuka Japan".

Upon that evidence I am not satisfied that the plaintiff has used in Singapore the word Tan San itself and without qualification so as to entitle him to the exclusive use of the words and I must say that assuming the evidence to remain the same at the trial of the action the plaintiff is not likely to succeed on that issue. That is a sufficient ground for refusing this motion for a Provisional Injunction but another important question has been fully argued upon which I think I should express an opinion.

The affidavit of H. Stephens which is not contradicted upon that point and which I cannot but take as correct asserts that

It was also contended that the name Tansan had become public juris. The proper of this having happened is that the use of the Trade Mark by other persons had ceased to deceive the public as to the maker. I am not sure that this may be said to have come about in Japan particularly among Europeans to whom the labels used are intended to appeal; but the question does not arise in Singapore as there is no evidence of any mineral water called "Tansan" having been imported by any person other than the Plaintiff (and the defendants since September 1901) The defendants' Counsel who relied upon the " Bokol Beer" case but it is clearly not applicable to the facts now before me .

The injunction prayed must be granted. Defendants must pay the Plaintiff's costs.

Parties to be heard on the question of Damages.

SD/ Lionel Cox.
17th Decemberr 1903.

In the Supreme Court
Settlement of Singapore

Suit. 1901. No.

J. Clifford Wilkinson.
VS.
Messrs. Mc Alister & Co.

WRITTEN JUDGMENT
of the Chief Justice delivered on the
17th December 1903.

Allen & Gledhill

5.

is given by other witnesses to whom it is not necessary to refer more fully. Upon the whole case I find in favour of the plaintiff that the word Tansan is not a generic name for Japanese mineral water but is of the nature of a fancy word not in common use and one which could be lawfully adopted as a Trade Mark.

But even if I had to find that in Japan the word "Tansan" is a descriptive name applicable to mineral water generally as is contended by the defendants I would have to hold also on the facts now before me that in Singapore it has acquired a secondary meaning and become so distinctive of the plaintiff's goods that the use of it by the defendants would have the effect of passing off their goods as the goods of the plaintiff. The plaintiff has imported his mineral water since 1893 under the name of Tansan. The other name "Takaradzuka" which also appeared as the label then used does not affect the question. The defendants imported the mineral water of Hasegawa & Co. under the name of Funagoya Tansan for the first time in September 1901 soon after they had ceased to be the Agents of the plaintiff and shortly before the commencement of this suit.

The water imported by the plaintiff has become known on the market as Tansan. Plaintiff has produced old wine list of Gosling & Co. who were formerly his Agents, and of the Hotel de'l Europe and of the Singapore Club, in which the Tansan is mentioned. It was ordered from the Plaintiff from Japan and it was invoiced by him to Singapore as Tansan, it was advertised and sold as Tansan. I find upon the evidence that the word had come to mean WILKINSON'S MINERAL WATER. It could really mean nothing else because there was no other water of the name on the market until the defendants brought in the Funagoya Tansan of course many people who bought Tansan may have been ignorant of the plaintiff's name. But the Yorkshire Relish Case (The Bir-

6.

mingham Brewing Co. VS. Powell. 1897. Appeal Cases. 710.) shows the circumstance is not conclusive the Lord Chancellor said "It may be true that the customer does not know or does not care who the manufacturer is, but it is a particular manufacturer he desires- he wants Yorkshire Relish to which he has been accustomed." In the same manner it may be said here. The man who ordered Tansan at the Club or Hotels or in Shops may never ^{have} heard of Wilkinson's name but they want the "Tansan" to which they have been accustomed and that is undoubtedly Plaintiff's Mineral water. If the Defendants are allowed to sell their Mineral water as Tansan people may be induced to buy it in the belief that it is Plaintiff's water.

It was further contended for the defendants that the label they use is so clearly different from the Plaintiffs but people buying bottles of Funagoya Tansan cannot possibly mistake it for Wilkinson's Tansan. ~~That~~ there is no doubt that a person looking at ~~a~~ bottles with those respective labels can easily distinguished Plaintiff's from Defendants' bottles- but there is not a sufficient answer to the Plaintiff's contention. The same defence was considered and rejected by the Judicial Committee of the Privy Council in the Club Soda case (Cochrane VS. McRihh. 1896. Appeal Cases. 225.) Their Lordships say "It is quite true that no one could mistake defendants' labels for plaintiff's. But that is not enough. People who ask for Soda do not as a rule handle the bottle ~~the bottle~~ and examine the label. The use of the word "Club Soda" is calculated to deceive". A strong case in favour of the Plaintiff upon this question is Apollinaries Water Co. VS Norish 33. L. T. 242. there the Plaintiff Co. Proprietor of the Apollinaries Spring sought to restrain defendant from selling an artificial water" containing the properties of the natural Apollinaries under the name of "London Apollinaries Water". It was shewn that the defendant to protect the plaintiff's right and prevent the public being misled sold his artificial water in bottles made expressly dissimilar in shape to the bottles used by the plaintiff and with labels as different as possible; yet an injunction was granted to restrain the defendant from using the word "Tansan Apollinaries."

3.

Mineral waters of Japan requires careful consideration for it is clear in law that a Trade Mark must be distinctive it must distinguish the goods of the owner of the mark from goods of a similar nature sold by other persons; and if the plaintiff here^{as a Trade Mark} as a Trade Mark a name which is merely descriptive of mineral waters generally his claim could not be supported. Unless he proved that he it has acquired a secondary meaning and become identified with his own name. The Plaintiff has joined issue upon the allegations made by the defendants and I have to consider the evidence for both parties taken here and also on Commission in Japan.

The defendants' witnesses say that Tansan which literally means Carbonic Acid is the name commonly used in Japan to describe mineral water generally, being an abbreviation of Tan San Sui " or Carbonic Acid Water. That it has been used for many years by owners of Mineral waters as shewn by the labels, many of which were produced and that according to Japanese Law Tansan cannot be registered as a Trade Mark so that no one can be entitled to the exclusive use of it. The witness Aramura Saburo mentioned a Trade Mark with the word Tansan granted in 1887 and that the word was applied by the Minister of Commerce to designate Mineral water and he referred to the Official Trade Mark Gazette. The Gazette and the Trade Mark of 1887 were not put in. In cross examination the witness said the name in the Trade Mark was not Tansan but Tan San Sui

I think the general effect of the evidence could not go beyond this, that Tan San Sui may have been used in Japan to describe Mineral Water but I am not satisfied that Tansan was so applied. The name was no doubt been used for some time and this may justify the decision of the Japanese Court of 24th October 33rd year Meiji (1900) which is mentioned by the witnesses to the effect that Tansan is a common noun but it does not follow it was so, when Wilkinson first adopted it as his Trade Mark. I have no clear evidence to shew ^{when} when

4.

those labels produced by the defendants with Tansan on them were first started. The printers were not called and there is no date on them or other documentary evidence in confirmation of the statement of Monankawa, Manager of Hasegawa & Co. the owners of the Funagoya Spring that he has known some of them for 4 or 5 years some for 6 or 7 years. His own label for the Funagoya Water he says has been used since 1897 but the plaintiff calls attention to the Chemical Analysis of the water which is dated October 1900. The year in which the label was registered.

Plaintiff has also shewn that several of the other springs such as Arima, Amano, and Hirano (Peacock) originally used labels without the word Tansan. He also produced by Edgar Thorn printer at Yokohama that his label G was printed in 1893.

Upon the evidence I have arrived at the conclusion that the labels produced by the defendants really came into use long after Wilkinson had adopted the word Tansan and by his exertions and at great expense had made it known and valuable as a Trade Mark.

For the Plaintiff Mr B. N. Chamberlain (Author of Things Japanese) quoting from the Standard Japanese Dictionary the Gekai says Tansan is defined as a Chemical term signifying a combination of Carbon and Oxygen ". He has never heard it used as signifying generally mineral water. Capt Brinkly Editor of the Japanese Mail who has resided 33 years in Japan and is the author in collaboration with Japanese professors of a Dictionary now in its fifth edition says " Tansan means Carbonic Acid the word is not in use among common people being a scientific term. It would be quite absurd to say that Tansan is a word well known as denoting generally mineral water. Sato Yutaro formerly head Master of the Commercial School, Kobe, says that Tansan is not a generic word applied to all Mineral Waters. Analogous evidence

別紙
2
J. Clifford Wilkinson.

VS.

Mac Allister & Company.

J U D G M E N T.

The question is whether the plaintiff is entitled in Singapore to the exclusive use of the word "TANSAN" as his Trade Mark in connection with Mineral water imported from Japan.

The plaintiff is the owner of a spring at a place called Takaradzuka near Kobe, the water of which he has sold since 1890. He issued first a label (F) describing the water simply as "Takaradzuka Mineral Water". It was suggested to him principally by Gosling & Co. his agents in Singapore that he should adopt another name instead of the long and for Europeans, unpronounceable word "Takaradzuka". In 1893 he adopted the word "Tansan" on the advice of Mr. Enslie, British Consul at Kobe and he had a new label (G) printed, on which the water is still mentioned as Takaradzuka Mineral Water but the word Tansan is printed in large white letters on a blue ground across the label. Plaintiff states he did not know then nor till five years afterwards the meaning of Tansan which is a scientific term nor at all in common use. From that time he advertised his water as Tansan to a large extent. Since 1895 he has spent from \$800 to \$1000 a month in advertisements. One striking mode of advertising resorted to by the plaintiff is mentioned by Mr. who was in Japan from January 1895 to December 1896. On the slope of a mountain near Moji the word "Tansan" was written in very large letters, so conspicuously that it could be read from ships passing along the coast. Wilkinson registered his label as a Trade Mark in Japan in April 1897. He has also obtain

2.

registration in America (1900) in Java, India and Australia.

The water was first introduced into this Colony under the name of Tansan (and with label G) in 1894. The defendants became Plaintiff's Agents in 1897. They ordered the water under the name of Tansan (as did other persons) and it was invoiced by the plaintiff as Tansan. It was advertised by the defendants and sold by them as Tansan. In 1901 the plaintiff wrote to the defendants complaining that the sales had not increased and informed them that he had appointed the Borneo Co. as his sole Agents. In fact the Company seems to have taken up the Agency somewhere in January 1901 and Mr Frank Hilton says the sales have been considerable. He adds that he had never heard of any other water ^{being sold} under the same name until Mr. Stephens, Manager of the defendants' Company told him " that he was going to run an opposition Tansan ".

Plaintiff heard in Japan in the same year that Hasegawa & Co. were shipping water for Singapore under the name of "Funagoya Tansan" and he wrote to his Agents to take proceedings. On 7th October 1901 defendants advertised in the Local papers the "Funagoya Tansan" which they admit had arrived for the first time in the previous month. On 12th November Plaintiff's Solicitors wrote to the defendants requesting them to cease advertising and selling under the name of Tansan. On 13th November defendants replied "the word Tansan is generally used in Japan to denote mineral water and no one has a right to its exclusive use" The plaintiff who was still in Japan was informed of the defendants' reply and by telegram instructed his Agents to commence an action. The Writ was issued on 16th December 1901.

Upon these facts, which I hold to be proved the plaintiff seems entitled to an injunction as prayed for, " to restrain the defendants from using the name Tansan or any other name of which the word Tansan forms a part etc".

But the defendants answer that the word Tansan is a common noun in the Japanese language generally used to denote the

實録一〇一七

三十七年三月廿八日正午 出

江
河
村

新子公博

田中 信幸

大臣

第廿一中事 岩波社訟事件ニ對シ

上告裁判所ノ判變アリタルヤ結果電

報
七
日

外務省

大臣 次官 政務 通商 人事 會計 取調

電受第 一三九號 Wds. 12

Via

Date, *London 28-3-1904 3-167* .m.

Received, *London 7/4* .m.

Komura

Fokio

炭酸事件の上告裁判所ニテ
亦論議スルニ列以ノ口取高
未定ナリ

Fabaka

3-1678

0059

文書讀覽

別紙

明治三十七年四月四日接受

91



明治三十七年 三月廿九日 起草
同 年 四月 五日 日 發 通

主任

次官

取調課

珍田外務次官

和田農務次官宛

新嘉坡ニ於テ炭酸商標許諾事件

ニ關スル地位等其申書等送付件

外務省

英領海峽殖民地新嘉坡ニ於テ每小炭酸

商標許諾事件ニ關シ別紙等ニ通令地帯

國領事領事等代理等報告於之其旨為右

参考右等送付件也

追テ各殖民地政廳ニ通告書送付等

取調ニ時口里之為メ其等送付ニ由テ成ル等

ノ般令件ニ上告裁判所ニ於テ并論等

ニ夕ニ判決、日取尚未定テ旨令地帯

文書課長

明治三十七年三月廿九日
同 年 四月 五日 起 草
日 發 遣



主任

次官

威詞課

[Handwritten signature]

明治三十七年四月五日 達

小村外務大臣

在マニラ山石谷代理店

布引炭酸高標訴訟ニ關スル件

其地ニ於テ客年來布引炭酸高標ニ

外務省

關シ神戸市村田一貫代理店「*[Handwritten]*」

ヤシドカリンジャーニ對シ英國人シテ、

カルド、少年ルキンソン等訴訟提起ニ由リ、

本署ニ該訴訟ノ結果若シテ、模倣

細必多ク存出被訴者ニ對シテ、

[Handwritten mark]

大臣 官次
政務 通商 人事 會計 取調

Via

Dated, *Singapore April 25* 1904. 11-55 a.m.

Received, 4-24 p.m.

電受第 1801 號
Wds. 6

*Komura,
Tokio.*

炭酸事件上告棄却ヤ

Tanaka

3-1678

0053

文書課長

明治廿九年四月廿九日 接受

73

明治廿九年四月廿九日 起草
同日 廿九日 發傳

主任

次官

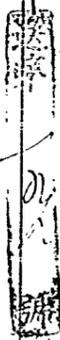
檢調課

[Handwritten signature]

逕商局



明治廿九年四月廿九日 謹啓



新田外務次官

新田外務次官 宛

新嘉坡ニ於テ炭酸高標

訴訟ニ關スル件

三十七年四月廿九日 配給

外務省

新嘉坡ニ於テ炭酸高標ニ關スル訴訟
 事件ニ付 毎少炭酸販賣代理店マカ
 リスタールヨリ 上告中ニテ 本月廿九日 附送
 第一五二号ノ 以テ 及以 通告 置キ 又 及 般
 該件上告 棄却セシメ 旨 在 地 帝 國 飲
 本ヨリ 電 報 有キ 就テ 斯ク 判決ノ 確
 定シタル 今日 且 早 救済ノ 途 其 之 候ト
 在 之 無 為 念 望 者ノ 以 意見 兼 出 改 反

74



法及照会

外務省

3-1678

0055

ナレトスニ付テ他ニ通告ノ名称高標ヲ付スノ必
要アリトス

右及報告ノ好具

明治三十一年四月廿九日

立新嘉坡

領事 田中 静吉

外務大臣 野澤 小 村 嘉 太郎 殿

尚書件ニ就テ英臘十一月廿日付公才二四号

ソテ照会奉答

立新嘉坡日本領事館

明治七年五月廿三日接受
海軍省

明治七年五月廿六日
同一年八月廿五日
日發遣

次官

敬調課

主任

通商局

川三

珍田

和田農長

新嘉坡

新嘉坡
三十七年五月廿六日
外務省

残字之通名地帯回信事

為参考

新嘉坡

文書課

明治廿七年六月三日接獲

43



明治廿七年六月廿七日起草
同 年 六 月 四 日 發 遣

主任

通商局長

取調課

Handwritten signature/initials

長崎支店長 山崎 啓

山崎 啓

山崎 啓

伊藤 啓

外務省

新七坡 新七坡 商標 註冊 事件

被告 即 支 店 長 山 崎 啓

代理人 山崎 啓 (Iwano and Co)

一 照 許 三 角 山 崎 啓 商 標 註 冊 事 件

一 照 許 三 角 山 崎 啓 商 標 註 冊 事 件

一 照 許 三 角 山 崎 啓 商 標 註 冊 事 件

一 照 許 三 角 山 崎 啓 商 標 註 冊 事 件

一 照 許 三 角 山 崎 啓 商 標 註 冊 事 件



明治廿七年六月八日接覽

取調課
手通書

松田

七四八

教第十八号

神戶市杉田一貫マニラ代理店「エーエガー」ガリンガー商
會ニ對シ英國人「ジエークリフ」ト「ウキルキンソン」ヨリ當地
ニ於テ提起シタル「杉引炭酸」商標ニ關スル「杉引」結果
及其ノ進行ノ模様詳細報告可致者先月五日付
送券ニ三年當信リ以テ「杉引」ニ趣致致承候
テ「杉引」成行及當所「杉引」目的物トシ炭酸水ニ關
聯シ當地ニ於テ發生シタル他ノ「杉引」商標等亦多ク保
セテ別紙ノ通り取調ニ及テ報告候條亦取調ニ付テ
所テ志成度此取調答申進候故具

明治二十七年五月拾八日

在外公館

在マニラ帝國領事館事務代理

外務省管山岩后 讓吉

在マニラ
日本領事館

外務省管山岩后 讓吉

此等商標登録商標ノ侵害ニ可貼札ヲ貼用スルハ瓶入水
 シ多量ニ輸入シテ其ノ液瓶及類似ノ瓶札ヲ有スル
 他ノ瓶ニ懸ク之ヲ破壊スルカ若クハ他ノ瓶札ヲ以テ之ニ貼
 替ヘシタシ云々トシテ而シテ田川商會ニ本件ヲ依拠本
 店猪原商會ニ移牒シ其ノ指圖ヲ仰キタリ後同レ
 九月二十日付リ以テ別紙ニ其ノ英文寫ノ通リ「マコドレ」
 商會ニ回答セリ後田川商會ノ意見ハ「田川商會ニ於テ
 其ノ液ヲ掲札シテ貼札ヲ有スル瓶入水ヲ當市ニ於テ販
 賣シタリトシテ其ノ田川商會ノ相争アリ「マコドレ」商
 會ニ於テ何事法紳上ノ設置シ標ヲセテトシ條件トシ
 及向身ニ月二日付「マコドレ」商會宛ノ書翰ニ於テ明池
 シタリ據約シ採消シ且之ヲ商會ニ返戻スルコトヲ條件
 トシ且日本ニ於テ依拠本件ノ指圖ニ依違シ田川商會ハ
 在外公館
 (London) 大英ニ掲札シテ貼札ヲ有スル瓶入水ヲ何事
 者以テ猪原島ニ於テ販賣セザルコトヲ誓約シ且「マコドレ」
 商會ニ於テ猪原島ニ於テ「炭酸水」ノ唯一代理店トシテ
 承認スルコトヲナシ
 大英猪原島店ハ有炭酸水ニ「炭酸」ト「マコドレ」商會對
 田川商會交渉事件ニ「炭酸」ト「マコドレ」商會對
 一月ニ多ク神戶市移田一貫計有布引炭酸ニ對シ更ニ
 前記「マコドレ」商會標權侵害ノ訴訟ヲ当地ニ於テ
 提起セリ
 移田一貫ハ自己ハ有炭酸水ニ對シ而シテ特許有ニ於テ
 明治三十四年七月一日付「マコドレ」商會ニ「Munobike」
 (London) 大英ニ掲札シテ商標登録ヲ受ケタリシカ当地ニ於テ
 炭酸「エーラガー」ガリ「ガリ」商會ニ神戶市 Japan Import

Granadan 十の語ニシテ果シテ炭酸糖水ヲ叙述スルモノ
 ナリトスルニ其語又ハ西班牙語ヲ通用語トスル國ニ於テハ
 法律ハ何處ノ物産ヲ叙述セムニテ果シテ文字ヲ勝手ニ
 排列シテ其意義不明ノ語ニ過キス從テ法律ハ何處
 ノ物産ニ對シテハ商標トシテ用ヒテモオモクナリト認ム
 原告：Granade Symp (石榴製果汁) 十の語カ
 合衆國ニ於テ商標トシテ登録セラルル先例ヲ引キテ
 Granade 十の語ノ Pomegranate (石榴) ニ對
 スル法律ニシテ Pomegranate Symp 十の語ハ合衆
 國ニ於テ商標トナラザルニテ Granade Symp ガ
 商標トシテ登録セラルルコトヲ申立タリ之ニ對シ被
 告：Schickan Schnapss (和蘭國 スキヤガ市
 製酒) ノ例ヲ舉グルニ Schnapss 十の語ハ常用語又ハ

在外公館

Schickan 十の語ハ著名ナル市ノ名称ナルニテ二語ハ合衆
 國ニ於テ自稱的又ハ假想的意味ノ語ニ非ラスシテ或種
 ノ物産ヲ叙述スルモノナリト解釋セラルル事ハ法律ニ
 而シテ此ニ先例ノ區別甚ク狭クナリト云フ事ハ斯ル問題ニ
 於テハ境界線ニ實際ノ必要上詳細ニ之ヲ畫セサルノ
 カラス本官裁判官ニ右ニ先例中 Granade Symp
 ノ例ニ當テ私事件ニ適應スルモノナリト認ム
 本官思フニ被告ハ可成原告ノ商標ヲ模倣シ以テ原
 告炭酸水ノ樽ニテ被告ヲ利用セシコトヲ努メタルカ如ク
 被告使用ノ貼札ニテ被告ノ思慮ヲ有スル購買者
 シ欺騙スルカ知リ原告ノ貼札ニ酷似セサル者ヲ
 被告代理人ヨリ申立タリ此ハ普通ノ場合ニ於テ
 糖水ヲ購買及飲用スルニ際シ何人トモ誤ニ葉種

物多ノ普通名標ナルヲ以テ商標タルコトヲ得ル物多ノ普通
 名標ヲ以テ商標トスルコトハ法律ノ精神ニ違フニ在リ
 國商標法ノ條々ニ於テ「Johannes Schmalzer
 ノ先例ヲ引キ且炭酸ヲ炭酸トシテ販賣スルニ當リ
 當此ニシテ何人ノ之ヲ知ルコトヲ欲スルノ權利ヲ有シ之ニ對シ
 他人ヨリ故障ヲ申立ルコトヲ得」云々ナリ而シテ之ニ對スル
 原告ノ申立キニ對シ「申立及裁決付物決ノ要旨」
 「Jansan」云々法ハ日本法ニシテ普通又ハ炭酸ヲ指ス
 エテ「コトハ之ヲ知セリ且」云々「曹達又ハ炭酸ノ」
 ニシテ炭酸水其者ノ意味也又「Jansan」云々法
 ニシテ果シテ炭酸水ヲ叙述スルニ「サト」云々「其後及
 西班牙法リ常用法トスルニ比シテ「Jansan」
 云々曰法ハ何處ノ物多ヲ叙述セシメシテ「騰牛」文字ヲ
 推列シ且魚意味ノ法「且」曰法ハ本島ノ言語ニシテ
 從テ日本法ハ本島ニ於テハ魚意味ナリトノ前提ニ出ツ
 故ハ本島ニ於テハ「Jansan」云々法ハ以テ商標ト爲シ
 得ルコトヲ之ヲ商標ニ適用スルニ又ハ其他ノ何物ノ使用
 スルニ均シク商標タルトアリ
 前掲判決後本件被告「早」ニガリ「カリ」ニガリ「高合
 代理人（兼獲士）」ニ於テ「調査」ニシテ「書數」
 據レハ「山」ニシテ「合衆國」及「他處」ニ於テ「Jansan」
 云々法ノ商標權ヲ有スルニ日本ニ於テハ然ラズコトヲ明治廿年
 四月六日「ハ」七四年ヲ以テ本邦特許「於」テ「登錄
 ラ」テ「商標」ハ「人」所有「商標」ニ「貼付ス」ル「貼」レ「全部
 ニシテ」決シテ「Jansan」又ハ「炭酸」ニ「單」ニ「文字」ヲ「登錄
 シ」ル「コト」又「山」ニシテ「神戶」之「所」居住「深見」因「告」(三)

在外公館



リ相争取り炭酸水之商標侵害ノ訴ヲ提起
シタリシカ明治三十二年十月十四日本邦特許局ノ裁決
ニ由リ原告ノ取訴トシテ神戶山本通リ居住廣田
重由ハ布引山蒸温泉湯井ノ炭酸水廣告者取リ揚
テシタリ者ヲ神戶警察署ニ出願シ明治三十八年八月
九日同署長山田佐平ノ認テ湯水ヲ而シテ後者取ノ
中央ハ炭酸ナル文字ヲ掲記セリ又前取杉田一男ハ
明治三十四年七月一日第一六〇一〇号ヲ以テ我國特許局
ニ於テ *Munselke's Jansen* ナル二語連流標文ノ商
標登録シマケテ又今人ニ於テ六月二十九日 *Jansen*
ナル單語標文ヲ商標トシテ登録シタリ者同特許
局ニ出願シタリシカ右ノ本邦法律ノ基キテ本邦特許
登録ヲ許ラセリヤリトシ又我國ニ於テハ炭酸水ノ商標

在外公館

水ノ商標ニ執シテ *Jansen* 又ハ炭酸ナル文字ヲ掲
記セザルハナシ且シ炭酸ノ普通名称ナルヲ以テ本邦政府
ニ於テ何人モ炭酸水ノ商標中ニ之ヲ掲記スルヲ許シ決シ
テ一人ノ專用ニ限ラセザルニシテ特許文内ニテ前記
山本通リノ炭酸湯井及新嘉坡ニ於テ *Jansen*
ナル商標登録ラカレシカ後兩地政府ニ之ヲ
拒絶セリトシテ
以上功等シタリカ如ク日本ニ於テモ亦香港及新嘉坡ノ兩地ニ
於テ *Jansen* ナル語ヲ商標トシテ認メザルニ因リ前
掲被告代理人コトハ此多數ノ实例ヲ証拠トシテ更ニ當
地裁判所ニ本件用審ノ訴ヲ提起セリトシテ主張シ
タルニ早ラシヤリヤリシカレ商會ハ訴訟費用ノ支出ニ堪
ヘザルニ以テ今日起訴ノ趣ニ多クモ在昔今日及ハリ

C O P Y.

Manila, May 29th, 1902.

Gentlemen:

We write to you on behalf of Messrs. Macondray & Co., sole agents in Manila of the water known as "Tansan Water" and representatives in this city of John Grifford Wilkinson, the owner of the trademark "Tansan." We ask that you cease selling water in this city under the name of "Tansan." The trademark and label "Tansan" has been registered in the office of patents, copyrights and trademarks in this city, and any unauthorized use of a label bearing the trademark "Tansan" is an infringement which the owner of the trademark will not permit. We are informed that you have recently received a considerable shipment of water in bottles whose labels infringe the registered trademark referred to. We must ask that all such bottles, as well as any others in your possession with similar labels, be destroyed, or other labels substituted on such bottles.

We trust that our request will meet with compliance on your part, and that any further steps for the protection of our clients' rights will be unnecessary.

Kindly let us have your reply before noon Saturday, May 31st, 1902.

Very respectfully yours,

(signed) Pillsbury & Sutro.

M. Tagawa & Co.,
Plaza Moraga,
Manila, P.I.

写
甲
号

C O P Y.

Manila, September 6th, 1902.

Messrs. Macondray & Co.,
Manila, P.I.

Gentlemen:

In consideration of no proceedings being taken by you against us for the sale in this city by us of water in bottles bearing labels with the words "Tan San," and in consideration of the cancellation and return to us of our agreement, as set forth in our letter of June 2nd, 1902, and addressed to you, and in pursuance to instructions from our principals in Japan, we hereby promise and agree that we will not sell any more water in these islands in bottles bearing labels with the words "Tan San." And we hereby desire to state that we recognize you as the sole agents for that water in these islands.

Very truly yours,

(signed) M. Tagawa & Co.

写
乙
号

明治三十七年六月十四日
同日
五月十八日
21

明治三十七年六月十日
同日
五月十八日
越眉

主任

取調謝

次官

珍田外務次官

和田農商務次官

コニラニ於ケル炭酸商標訴訟

事件

外務省

米傾マニラニ於ケル炭酸商標訴訟事件
ニ付當者ノ同存・對シ別紙寫シ通令地
帝國領事代理ヲ報告存之步官為
此參考及出通標

別紙
五月十日附
報告存之步官
信附外務省
寫

コニラニ於ケル